

会議議事録(抄)

会議名	2023年度専門学校東京テクニカルカレッジ 第二回情報処理科教育課程編成委員会
開催日時	2023年12月1日(金)15時40分～17時00分
会場	専門学校東京テクニカルカレッジ 地下1階 テラホール
参加者	<p><外部委員> 後藤 英明 (ドコモ・データコム株式会社) 経塚 真裕 (ソフトビューベリオン株式会社) 酒井 秀樹 (株式会社エフ・エム) 坂上 誠 (株式会社テクノプロ テクノプロデザイン社)</p> <p><オブザーバー> 山本 仁 (ソフトビューベリオン株式会社)</p> <p><内部委員> 井坂 昭司(専門学校東京テクニカルカレッジ 情報処理科科长)</p>
	<p><系別分科会>(第二部)</p> <p>1.議長挨拶 井坂より挨拶 2.前回(系別分科会)議事録の確認 3.意見交換 この半年の変化、生成 AI の活用について、Excel の活用について、その他</p>
討議内容	<p>1.この半年の変化</p> <p>【井坂】 この半年間、開発現場で変わった事が何かあれば伺いたい。 生成 AI の活用など、これからどう変わっていくか。 専門学校なので、最先端をやるというよりも基礎をしっかりとやるということは変わらないが、とはいえ、新しい技術などは伝えて行ければと思う。</p> <p>【山本】 がらっと変わったということはないが、入札案件など最新技術がなかったような官庁でも最新の技術を使って、安くしないとできないような値段設定になってきている。 勉強をして最新技術を使い効率化していかないといけないような状況にはなってきた。</p> <p>【井坂】 効率化というのは、納期短縮とかそういったこと？</p> <p>【山本】 そう。今まで通り手でやっていく見積りだと取れないくらいのラインが引かれている案件が出てきている。</p> <p>【経塚】 11月にシンガポールに行ってきた。 日本の危機感を感じる。 シンガポールは資源がないところだが政府が30年後50年後のイメージをうたっている。 国のあるべき姿とそこに向かってテクノロジーがどう発展していくのかが見えた。 スモールシティだからというのもあるが、速い。</p> <p>技術の発展というよりかは、学ぶ姿勢さえあれば IT 企業は適応できていくのではと思う。 技術で焦る必要はないかと思う。</p> <p>【井坂】 学ぶ姿勢という点では、専門学校生は受け身な子が多い。 自分で学び、やっていく子は1割程度。 受け身な子にたいして何かアプローチがあれば。</p>

【山本】

自分で学習といっても、その子を変えようというのは難しいと思うので、最初は無理にでも習慣化させるしかないと思う。

【井坂】

通常の授業は完全に受け身なので、制作の時間を増やした方が良いのか。

【山本】

自分たちでやった結果に対するフィードバックをきちんとしてあげないと、できているのかが認識できないと思う。が、先生たちの負担が多くなるので難しい。企業さんたちに手伝ってもらったりとか。

【井坂】

今、グループ制作では自分で好きなものを作っているが、題材を与えてそれに向かってどう解決していくかを競争させても面白い。

【経塚】

ミッションを与えてやる気を出す人もいる。学生はビジネスを生み出すよりは、ミッションを与えて、それに向かって考えなさいの方が良いのでは。お金を稼ぐようになってから、イノベーションの考え方を身に付けた方が良いのかな。

【阪上】

採用をやっていて、最近の学生は何を求めて就職活動をしているかを問うと社会課題の解決に貢献しているだとか Purpose とかが出てくる。そういうことに興味を持っているのは良いこと。

制作のテーマはどう決めているのか。

自分のやりたことなのか、世の中で困っていることなどのテーマがあってそれを解決するのを目的として制作をしているのか。

【井坂】

グループを作って、先輩たちの制作物を見て、自分の興味のあることで制作するという感じ。大体 EC サイト。社会貢献というテーマを持っているのはない。人の役に立つというのは多少頭にあるのかもしれないが。目的としては、自分たちの興味のあることを題材に Web アプリケーションを作り上げるということになる。

【阪上】

社会課題解決するものを作れというミッションにするとかになると、面接でも使える。仕事に対する向き合い方みたいなところの言語が良いとかではなく、社会との接点みたいな。

【井坂】

今のやり方だと、社会課題とかは扱わないので、ビジネスちっくではない。

【阪上】

一年生のうちは好きなもので良いかと思う。二年生はステップアップして社会課題解決に目を向けると良いかも。

【酒井】

半年間という区切りでは話せないが、生成 AI については社内で教育しようという動きになっている。教育の中でどう活かせるかとなると、モチベーション高い子は自分で勉強もできるし、どんどん進められるが、自己流で進める子も多い。大学生と比べると、レベルは高く見えるが現場に入ってみると自己流の人が多く嫌煙されがち。なのでできるからといって OK とするのではなく、求められている問題をしっかり認識するだとかが必要。モチベーションが低い子は成功体験が必要なのは。考えさせたり、0から1を作るヒントを得るのに生成 AI が使えると個人的には思う。使い方さえ間違えなければ良いツールになる。

【後藤】

本音をいうと、グループ会社同士の再編や連携が出てきている。
今までは上流的な工程が7割程度なので、技術がなくても勝負できたが、半年で再編とかもあったので技術的な部分も必要なことができてきている。
下流的な業務も増えてくるのではと考えられている。
そうなってくると今まで大卒が多めだったが専門卒の採用も必要だと感じている。

【井坂】

二年間という時間が無い中で、制作は一年生は掲示板、二年生は SNS サイトやショッピングサイトだが
その中で何のために作るのかを考えさせるなど強化していく。
世の中そのまま使える技術がどれくらいあるかなど。

今話した中で、ローコード、ノーコードは実際どういうイメージなのか。

【山本】

代表的なところでいうとAWSの裏側、認証周りとかを自動でつくってくれるとか、
データアクセス周りとかも自動で作ってくれる。
フロントは書かないといけないが、バックエンドだけノーコードで組んだりしてました。

ただ組むためには、何ができるかというのを知ってないと使えない。

【酒井】

フローチャートみたいなものを画面上で移動するだけで裏でソースコードができていく。
アウトシステムズというのが例。これがローコード。
これをやるにはアルゴリズムとかの基本的な部分はわかってないと使えない。
そういうところを、しっかり学校で学んできている人は強い。

【山本】

わかってないとお客さんに説明できない。

【酒井】

運用ができて改善ができなくなってしまう。

【経塚】

ローコード、ノーコードは気にしなくて良いと思う。
今後企業の IT レベルが上がってくるので、企業側でどっちでいくのか決める。それに対して、技術者が対応していかたちになるので、どのパターンでできて大丈夫なようにしておけば良い。

2. 生成 AI の活用について

【井坂】

生成AIについて、活用していますか？

【経塚】

試しですね。

【山本】

API とかにして業務利用として生み出すまではできていない。
それを使って何ができるかを考えている段階。

【阪上】

製造業のお客さんなので、まだ開発環境の中で生成AIを使うところまではいっていない。

【井坂】

アメリカと比べるとどうなのか。

【阪上】

日本の方がポジティブな印象。

【経塚】

コミュニケーションツールという点では使える。
ビジネス上のやりとり等で。

3. Excel の活用について

【井坂】

Excel の活用方法について、以前 Excel ができない子が多いと聞いていたので、授業でどういったことをやるべきか。

本を色々みてみたが、ほとんど機能重視で企業での活用方法というのではない。

【酒井】

Excel を使えてよかったと思ったのは、会計系の年間売上を表でまとめるようなシステムで、それを新しくリニューアルするときに、原簿比較をするのにピボットテーブルやVLOOKとかを使ったこと。

あとはアクセスログの集計など。

【山本】

新入社員研修では、まず表など例題が記載されている紙を配り、それをそのまま作成するというをやっている。出来るようになったら、条件だけ書いて、この条件を満たすように作成する。

例えばA4必ず印刷できる勤怠表を作成させるとか。

【井坂】

Word の活用はどうですか？

【酒井】

手順書とかには使う。

4. その他

【井坂】

精神面で弱い学生が多い。

【阪上】

運動会とか、みんなで何かをやるようなものはないんですか？

色んな人と交流を持てた方が良いのでは。

一歩引いて、色んな考え方に触れるのも良い。

【井坂】

昔は体育祭もあったが、今はやってない。

カフェを作った時はできたが、良い題材がなかなか。

以 上